

日本語学習者の漢字語彙の読み間違いと母語話者の
「言い間違い」との関連について
-音声教育と漢字教育の融合を目指して-

メタデータ	言語: Japanese 出版者: The English and Foreign Languages University Press 公開日: 2024-07-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 黒崎,典子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/0002000685

10. 日本語学習者の漢字語彙の読み間違いと母語話者の「言い間違い」との関連について —音声教育と漢字教育の融合を目指して—

黒崎 典子
Noriko Kurosaki

要旨

学習した漢字語彙の読み方をすぐに忘れてしまうと悩む学習者は多い。漢字の読み方テストでの誤用研究には、母語干渉からのアプローチが多いが、本研究では日本語母語話者の言い間違い研究をもとに、上級日本語学習者の漢字語彙の読み間違いの傾向を調べた。

調査対象とした漢字の読み方テストは、授業後に行う復習テストのため正答率が高いが、それでも平均 10%は誤答が出た。出題範囲が明示され、十分な復習がされているにもかかわらず、読み方を間違えてしまうというその誤答にはどのような傾向があるのだろうか。本調査では、誤答が音声的要素による傾向を持つものに焦点をあて、日本語母語話者の言い間違いの傾向と比較を行った。その結果、日本語母語話者の言い間違いの傾向と漢字の読み方テストの誤答の傾向において、「モーラ数が保持される」、「母音が保持される」という点が類似していることを明らかにした。ここから、発話モデルにおける発話と、漢字の読み方を思い出し記述するという言語行為が、同じルートをたどって表出されている可能性を示唆した。

1. はじめに

初級の学習を終えた日本語学習者にとって、増え続ける漢字語彙の習得は日本語学習の大きな壁の一つとなる。学習した漢字語彙の読み方をすぐに忘れてしまうと悩む学習者は多く、非漢字圏、漢字圏ともに共通する問題である。藤田（2019）で報告された調査においては、クラスで学ぶ漢字を学生に見せたところすべての学生が 90%以上の漢字を知っていると答えたが、実際に読み方テストをすると正答率は 31.8%となり、読めない漢字が多かったということを指摘している。では、「知っている」と思っている漢字をどのように間違えるのだろうか。

一度学習し、記憶しておこうとした漢字の読み方について、どのように間違えているかという調査は漢字圏学習者の母語干渉の観点からの研究に見られるが、漢字の読み方を音声

面から捉えて分析した研究は非常に少ない。

そこで、本研究では、上級学習者に対して行った漢字の読み方テストの誤答例を分析し、漢字語彙の正確な読み方を定着させるために学習時に留意すべき点について、日本語母語話者の「言い間違い」のメカニズムと関連させながら考えていきたい。

2. 調査対象について

本調査では、留学生入試を経て日本の大学に入学した大学 2 年生の留学生^{註1}を対象とした「漢字語彙の読み方テスト」の結果を分析した。テストは、新聞記事（社会欄、政治欄）と新書レベルの読みものを使用した読解授業を経た後、出題範囲を明示して一週間後に実施した。

2. 1 テスト概要

今回対象としたテストは 11 回分（2017 年～2019 年）、出題した漢字語彙はのべ数で計 287 語である。対象とした漢字語彙は、読みレベル、語彙レベルともに JLPT の N2 以上である。

出題語彙は実施 1 週間前には授業において学習済みのものであり、かつ、漢字テストの出題範囲も学生に周知している。つまり、授業で学び、復習をし、出題されるとわかっているため、テスト前に勉強し直しており、正確に記憶し続けていけば間違いが出ないはずのテストともいえる。このような状況の中で、テスト結果においてどのような誤答が現れるのか、そして、その理由として考えられる言語学的な傾向は何かを検討した。

2. 2 テスト結果概要

表 1 は 2017 年から 2019 年の 3 年分のテスト結果概要をまとめたものである。被験者は各年毎に異なるが、5 名から 15 名であり、問題数も読解教材により差があり、14 から 40 問となっている。

2.1 にも述べたように、本テストは間違いが出ないはずのテストともいうことができるが、それを証明するかのように正答率は非常に高く、87.5%から 97.0%であり、平均 90%を超えている。

このように正答率が高くなるはずのテストにおいてさえも、間違えてしまう場合、それはどのように間違えているのだろうか。先に述べたように、漢字圏の学習者には母語の干渉が関連していると言われることが多いが、本調査では、母語に関わらず共通する傾向が見られた。そこで、次章ではその理由について詳しく検討していきたい。

(表1) 読み方テスト結果概要

	2019年			2018年				2017年			
	第一回	第二回	第三回	第一回	第二回	第三回	第四回	第一回	第二回	第三回	第四回
被験者数	15	14	15	6	5	6	6	14	14	14	14
問題数	30	17	24	28	14	21	23	40	20	40	30
平均点 ^{注2}	27.1	16.5	21.0	26.0	12.6	20.0	20.7	35.6	17.9	36.4	26.8
正答率 (%)	90.3	97.0	87.5	92.9	90.0	95.2	90.0	89.0	89.5	88.5	89.3

のべ被験者数	123
問題数合計	287
正答率平均 (%)	90.8

3. 誤答傾向

2. で述べてきた調査対象についてそれぞれの誤答の理由を検討していくと、次のような傾向が現れた。

- ①漢字語彙の読み方のモーラ数が保持されている。
- ②子音に比べ、母音が保持されている。
- ③前部、あるいは後部の音が保持され、他の語彙をあてはめている。
- ④関連する意味の記憶が保持され、その読み方を当てはめている。
- ⑤関連する意味からの推測で読み方が類推されている。

本稿では音声的要因を取り入れた漢字教育について検討していきたいため、このうち、音声的要因に関する傾向、つまり①「モーラ数の保持」、②「母音の保持」という2点について見ていきたい。

3. 1 モーラ数の保持

ここでは、出題された漢字語彙のモーラ数と、誤答のモーラ数について見ていこう。

表2は、誤答のうち、正しい読み方と誤答のモーラ数が同じであったものの一部である。これらを見ると、読み方は誤っているが、モーラ数は保持している例であるということがわかる。例えば、「趣」の誤答には、「あぢむき」、「おもむろ」という4モーラの誤りがあり、漢字から連想されうる「しゅみ」という2モーラの解答、または音読みの「しゅ」という1モーラの解答はなかった。同じように「自ら」についても「みずらら」という4モーラの誤りがあったのに対し、「みずら」のように3モーラの解答はなかった。「薪」についても、読解教材で学んだ「まき」が正答であったが、「たき」、「まち」という2モーラの誤答があったものの、「たきぎ」という別の読み方の解答はなかった。「焚く」も「やく」、「かく」のよ

うに同じ2モーラの解答はあったが、「たたく」などのような3モーラ以上の解答はなかった。ここから、誤った解答をする際、モーラ数の記憶は維持したまま、モーラ数が同じ他の読み方で書いてしまう傾向があることがわかる。漢字語彙を記憶する際、モーラ数を保持して記憶している傾向が高いということがわかるであろう。

(表2) モーラ数別誤答の例

モーラ数	漢字語彙	読み方	誤答例
4モーラ	趣	おもむき	あざむき、おもむろ
	乏しい	とぼしい	まずしい
	陰影	いんえい	えんえい、かんえい
	統括	とうかつ	とうやつ、つうかく
	自ら	みずから	みずらら
	従順	じゅうじゅん	じゅうしゅう
3モーラ	奉仕	ほうし	ぼうし
	嘆く	なげく	なでく
2モーラ	薪	まき	たき、まち
	焚く	たく	やく、かく

では、誤答のモーラ数が正答と同じもの、異なるものの割合はどのようになっているのか。表3、4を見ていこう。

表3は誤答の現れた項目について、モーラ数保持、モーラ数変動(減少、増加)した項目それぞれの数と割合、表4は個々の誤答について同じく、モーラ数保持、モーラ数変動の項目それぞれの数と割合を表している。表3については、モーラ数保持項目が66.0%、表4についてはモーラ数保持解答数が66.9%と、ともに変動項目、変動解答と比較して多い。つまり、誤答といってもモーラ数に関しては正確で、モーラ数は保持したまま解答する傾向が見られる。

(表3) 誤答のモーラ数(項目数別)

モーラ数保持項目		66	66.0%
モーラ数 変動項目	モーラ数減少	23	23.0%
	モーラ数増加	11	11.0%

(表4) 誤答のモーラ数(解答数別)

モーラ数保持解答数		81	66.9%
モーラ変動 解答	モーラ数減少	25	20.7%
	モーラ数増加	15	12.4%

3. 3 母音の保持

次に、誤答に該当する音節において、母音の方が子音に比べ、保持されている点に注目する。表 2 を再度見ていこう。例えば「統括」の誤答には「とうやつ/toRyatu/」、「自ら」の誤答には「みずらら/mizuɾara/」、「薪」の誤答には「たき/taki/」、「まち/maɕi/」、「焚く」には「やく/yaku/」、「かく/kaku/」が見られた。これらは、誤答の当該音節において母音は正しい読みと同じであるが、下線部の通り、子音が異なっている。表 5 で、再度例を見ていこう。

(表 5) 音節における誤答部分

		読み	対象音節		読み	対象音節
正	統括	とうかつ	/-ka-/	自ら	みずから	/-ka-/
誤答		とうやつ	/-ya-/		みずらら	/-ra-/

		読み	対象音節		読み	対象音節
正	薪	たき	/ta-/ /-ki/	焚く	たく	/ta-/
誤答		まち	/ma-/ /-ti/		やく	/ya-/

		読み	対象音節		読み	対象音節
正	共感	きょうかん	/-ka-/	共鳴	きょうめい	/-me-/
誤答		きょうさん	/-sa-/		きょうえい	/-e-/

		読み	対象音節		読み	対象音節
正	終身	しゅうしん	/sjuR-/	序列	じょれつ	/-re-/
誤答		ちゅうしん	/tjuR-/		じょねつ	/-ne-/

		読み	対象音節		読み	対象音節
正	施し	ほどこし	/ho-/	勤怠	きんたい	/ki-/
誤答		こどこし	/ko-/		ちんたい	/ti-/

表 5 のように、音節単位で誤りを見ていくと、母音は同じであるが子音に誤りが出るといふ例が多くある。そこで、音節単位での誤りの内、母音と子音のいずれに誤りが現れているのかについて分類したところ、表 6 のようになった。

(表 6) 母音・子音にかかる誤答解答数

子音にかかる誤答解答数	94	74.6%
母音にかかる誤答解答数	32	25.4%

母音にかかる誤答解答数が子音にかかるものと比較して約 3 分の 1 と明らかに少なく、ここから、音節単位での誤りのうち、母音が保持されたまま間違っている例が多いということがわかった。

3. 3 誤答傾向と「言い間違い」

3. 1、3. 2 で見てきたように、音声的要素に関する誤答においては「モーラ数」「母音」が維持されたまま「誤った形をアウトプットする」という現象が多く見られた。

こうした傾向は日本語母語話者の起こす「言い間違い」のケースと非常に類似しているようである。言い間違いとは、寺尾 (2002) によると「意識によるコントロールがきかないレベルで起こる、言おうと思ったことからの逸脱 (p.34)」である。日本語学習者の漢字の読み間違いと母語話者の言い間違いというのは関連がないように見え、管見では日本語教育においても議論されている例を見ない。しかし、間違いが起こらないほど習熟した内容についての上級日本語学習者によるアウトプットと、日本語母語話者のアウトプットとして捉えると、その言語処理過程において類似性は起きるのではないだろうか。

そこで、次章では母語話者の「言い間違い」について、先行研究である寺尾 (2002) を中心にその特徴を見ながら、学習者の漢字の読み間違いの傾向について考えていきたい。

4. 「言い間違い」との比較

本章では、前章で見てきた上級日本語学習者の漢字の読み間違いの傾向が、どのように日本語母語話者の「言い間違い」と似ているのかについて見ていきたい。

4. 1 「言い間違い」の特徴

まずは、寺尾 (2002) をもとに、「言い間違い」の特徴について見ていこう。

4. 1. 1 言語的単位

寺尾 (前掲) で述べられているように、言い間違いは決して無秩序に起こるわけではない。多くの場合は誤りとしてとって代わる要素と、とって代わられる要素は同じ言語学的単位に属することが確認されている (p.38)。例えば、文法レベルで見ると、「アパートのある風呂はいい」は「風呂のあるアパートはいい」の交換型の言い間違いの例で (寺尾 (2002:41-42))、名詞と名詞という同じ単位が交換されている。「*風呂のアパートあるはいい」というように、動詞「ある」と名詞「アパート」という異なる単位の場合は、単語の語頭が同じ音同士あっても交換する言い間違いは起こらないということである。音韻レベルにおいても、「洗濯かご/seNtakukago/」が「けんたくさご/keNtakusago/」のように子音と子音という同じ単位が交換される言い間違いは起こるが (寺尾 (2002:50))、「*/aeNtskukago/」のように、母音と子音という異なる単位の交換が起こること、発音として不自然、あるいは不可能という形の交換が起こることはないということである。入れ替えが起こる単位は、語レ

ベルよりも大きい文体レベル、句レベルという単位で起こることもあるが、本稿では、「モーラ」「子音・母音」について検討するため、語レベルよりも小さい音韻レベルの事例について見ていきたい。

以下は、音韻レベルのうち、「①モーラと音節」「②分節音（子音と母音）」「③さらに小さな単位（素性）」「④その他（複数モーラ、アクセント）」の例である（寺尾（2002:46-53））。

・音韻レベル①——モーラと音節

「かたま、頭が固い」

「アドブリ」（アドリブ）

「チャーハンとすーか、中華スープ食いに行く」

「かんすいせん」（潜水艦）

「poppy of my caper」（copy of my paper）＜オンセットの入れ代え＞

「the round got pounded」（raft）＜ライムの移動＞

・音韻レベル②——分節音（子音と母音）

「けんたくさご」（洗濯かご）

「あまり人気のたいとりです。」（人気のない鳥）

「いもな、いまのお気持ちは」

「ふみきれの上にあります。」（ふみきり）

・音韻レベル③——さらに小さな単位（素性）

「バイパス」（バイパス）

＜p、bの素性の誤りの例（-有声性、+有声性）＞

・音韻レベル④——その他（複数モーラ、アクセント）

「てま、へやにとめてもらおう」

＜/heya/の母音部分のひな形/_e_a/が維持されて、そこの空欄の子音部分に「とめて/tomete/」の子音がはいったようにとれる例＞

①～④では入れ代わる単位がモーラから素性にまでにわたっているが、こうした音韻的言い間違いはもっとも頻繁に現れるという（寺尾（2002:105））。

4. 1. 2 言い間違いのモーラ数

語レベルの言い間違いには、発話の際に「心の辞書」から語彙を呼び起こす際に意味的要因が重要だとされている（寺尾（2002：72-73））。寺尾（前掲）では345例のうち5パーセント以下が意味的な関連性が薄いとされているが、意味的要因ではない言い間違いにはど

のような特徴があるのだろうか。寺尾（2002）では、「意味的な関連性が見出しにくい例のほとんどは、音韻的要因である語頭音、アクセントパターン、モーラ数が一致（pp.78-79）」すると述べている。さらに、モーラ数においては、「誤りに関係した二語の長さがほとんどかわらない（同じ長さか一モーラ違いの合計が 90%以上）（p.81）」とし、表 7 の表を提示している。

（表 7）意図した語と誤った語の長さ（モーラ数）の差

0	209	
1	103	
2	24	
3 以上	9	（寺尾（2002:81））

モーラ数の差が「0」の割合を計算すると 60.6%となり、この割合は 3. 1 で見てきた、学習者の漢字の読み方の誤答におけるモーラ数が変わらない割合（項目数別 66.0%、解答数別 66.9%）と近似している。同じ長さか 1 モーラ違いの合計は 90%以上になるという点については、読み方の誤答データにおいても追加調査が必要であるが、学習者の誤答でモーラ数が保持されているというふるまいは、言い間違いにおけるモーラ数の特徴と似ている傾向があるということが言えるだろう。

4. 1. 3 言い間違いの中の子音／母音

寺尾（2002）では自立モーラに関わる代用の言い間違いについて、その実例の分類を行っている（pp.122-123）。ここでは表 8 のように、「子音・母音ともに異なる 14」「母音が共通で子音が異なる 82」「子音が共通で母音が異なる 57」としているが、母音と子音のどちらが保持されたままかと言う視点から見ると、母音の方が多いことがわかる。

（表 8）自立モーラどうしの誤りの分類

子音・母音ともに異なる	14	
母音が共通で子音が異なる	82	
子音が共通で母音が異なる	57	（寺尾（2002:123））

さらに、語の中の音位転倒の例を挙げ、表 9 のようにまとめ説明している（pp.131-132）。

ここからも、「母音が共通しているモーラ間での子音の交換が六割近くという多数を占め（p. 132）」という音位転倒の傾向がはっきりしている。寺尾（200:32）でも述べているように、この結果から、モーラ、または子音の誤りを強調するのは難しいところではあるが、母音の交換が極めて少ない、母音が保持されているということは言えるであろう。

(表 9) 音位転倒が生じた単位

子音	16	
母音	6	
子音かモーラ (母音が共通)	62	
母音かモーラ (子音が共通)	3	
モーラ	21	
モーラか音節	2	
子音かモーラか音節	2	(寺尾 (2002:131))

以上のことから、3. 2 で見てきた漢字の読み方の誤りのうち、母音が保持されているという傾向は、言い間違いの傾向と似ているといえることができる。

4. 2 漢字の読み間違いと言い間違い

3. で検討してきた漢字の読み方テストにおける誤答傾向の音声面に関わる特徴は、4. 1 で見てきたように、母語話者の言い間違いの例や特徴によく似ていることが明らかになった。4. 1. 2 では、言い間違いの中で意味的な要因ではない場合、モーラ数がほとんど変わらないことを述べ、それは、学習者の漢字の読み方テストの誤答と類似していることを明らかにした。4. 1. 3 では言い間違いの中の代用、音位転倒の例において、子音よりも母音が多く保持され、それも漢字の読み方テストの誤答傾向と似ていることを明らかにした。

では、上級日本語学習者の漢字の読み方の誤りと日本語母語話者の言い間違いに類似性が見られる理由として、どのようなことが考えられるのであろうか。次章では、発話モデルの中での表出過程を検討し、日本語学習者が漢字語彙を認識して読み方を表出する際、言語処理過程ではどのようなことが起きているのか仮説を立ててみたい。

5. 表出過程の検討

概念から音声言語として発話に至るまでの発話過程については、Levelt (1989) の「標準モデル」とされる概念図があるが、ここではそこから発展した Bock and Levelt (1994) の言語生成過程のモデル図を見てみよう。

図 1 に見られるように、言語生成過程においては、まず伝えようとするメッセージがあり、それから機能的処理 (Functional Processing)、位置的処理 (Positional Processing) という文法的符号化 (Grammatical Encoding) を経て音韻的符号化 (Phonological Encoding) し、出力システムへと進む。

(図1) 言語生成過程の概観 (Bock and Levelt(1994:946))

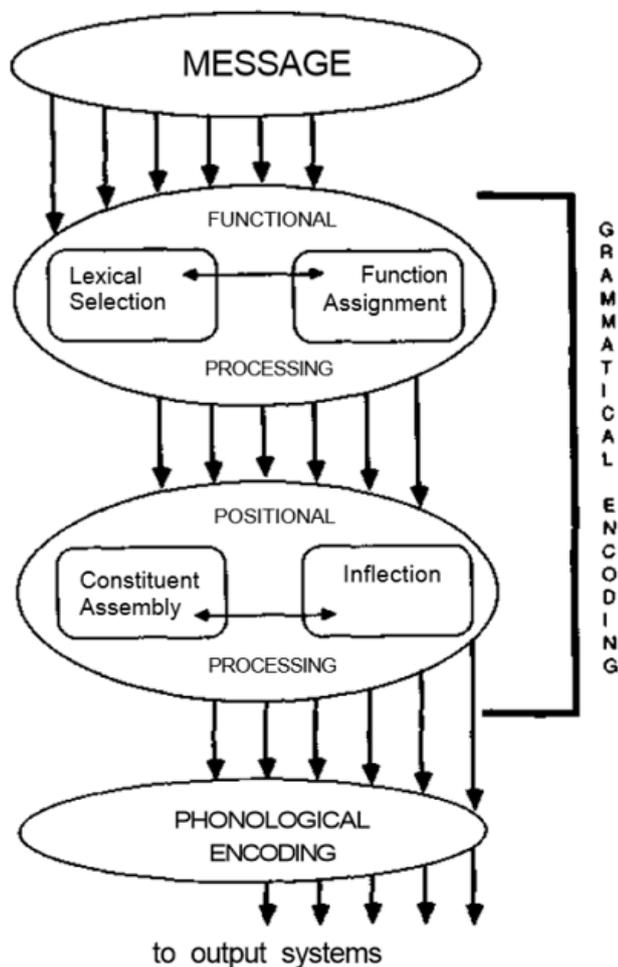


FIG. 1 An overview of language production processes.

この図1のモデルをもとに、上級日本語学習者が長期記憶される前の漢字を目にし、読み方を出力するまでの過程を考えてみよう。学習者は、読み方を解答するタスクを与えられたことから、その漢字に対するアウトプットを求められることになり、言語生成過程のモデルにおける語彙選択 (Lexical Selection) の過程に入ると考えられる。自然な言語生成過程においては、メッセージを音韻的符号化していくのであるが、この場合はその他の文法的な符号化を必要とせず音韻的符号化へと移行する。その結果、漢字の読み方として出力されることが考えられる^{注3}。以上のことから、発話の生成過程と、一度覚えた漢字を思い出し表出するという言語行為は、同じルートをたどって表出されていると考えても良いであろう。

では、これを踏まえて、言い間違いと漢字の読み方の間違いがどのように起こるのかを考えていこう。

寺尾 (2002:20-35) にあるように、「発話」を「意識のコントロールが及ぶか及ばないか」と「思った通りのことを言っているか言っていないか」で分類した際、通常の発話が「意識

のコントロールが及ばず」「思った通りのことを言っている」だとすると、言い間違いは「意識のコントロールが及ばず」「思った通りのことを言っていない」表現となる。つまり、音形としての言語を表出する際に、最も自然な（＝意識のコントロールが及ばない）発話において、思った通りのことを言う（＝すでに何度も学習した通りの表出ができる経路を用いて発話する）ことができずに、表出経路のいずれかで言語単位の入れ替えが起きてしまい、言い間違いへと繋がっているということである。

このような母語話者の発話の流れを、上級日本語学習者の漢字の読み方を表出する場合に当てはめて考えてみよう。何度も学習して一度は記憶したはずの読み方を表出すると、「意識のコントロールが及ばず」、自然に表出される読み方が現れ、しかし、表出経路のいずれかで言語単位（ここでは音韻レベルの単位）の入れ代えが起き、誤った読み方になる、というように、母語話者の言い間違いの過程と非常によく似ていると考えられないだろうか。習熟した日本語学習者の表出過程はすでに母語話者のそれに近くなってきていると考えられるが、新たな単語を習得した際には記憶保持の状態から表出する際の経路において「意識のコントロールが及ばない」形で「思った通りのことを言っていない」というルートを辿るようなエラーが出やすく、言い間違いの起こる経路と同様の過程をたどってしまうといえるだろう。つまり、完全に長期記憶化される前に間違える漢字の読み方の形は、日本語母語話者の言い間違いと同じ表出過程を辿っていると仮定することができる。

漢字を学習する目的が、意味を理解することだけではなく、必要な時にその読み方を表出するということであれば、このような自然な言語処理過程を正しく理解し、それに沿った形での指導をすることが必要で、それにより、学習者に無駄な負担をかけない指導、学習者がアウトプットする際の意識、記憶定着に寄与できる指導ができるのではないかと考える。

6. 漢字指導法への応用

最後に、ここまで見てきた漢字の読み間違いと母語話者の言い間違いとの関連性を踏まえた、漢字の読み方指導への応用について考えてみよう。

「言い間違いは不規則に起こるものではない」ということから「漢字の読み方の間違いも不規則に起こるものではない」と言うことができるだろう。特に、漢字圏学習者の場合は母語の干渉からその傾向がわかりやすいということはあるが、非漢字圏学習者の間違いに関しても、決して不規則に起こるものではないということである。特に、非漢字圏の学習者は漢字も音声の面からとらえ、理解する傾向があるといわれているため、漢字圏学習者よりも、今回の言い間違いとの類似性は高いといえるかもしれない^{注4}。

こうしたことから、漢字語彙の読み方の教育については、これまでのように、漢字の読み方を単語教育と共にして教えるだけではなく、音声的な面も含む間違いやすい要素に対する的確な指摘をし、漢字の正確な読み方を定着しやすくする必要があるであろう。

例えば、本稿の議論により以下のような音声的要素を取り入れた指導を漢字教育で行うこ

とは、効果的であると考える。

- ・特殊拍の部分に焦点をあてる。モーラ数を意識させる。
- ・類義等、意味的に近く、モーラ数が同じか1つ違いの単語を提示する。
- ・子音交代（言いやすさ、調音点の移動方向）についての指摘をする。
- ・母音については特別な指摘はしてくとも良い。

漢字、漢字語彙の授業例として、藤田・渡部他（2014）で紹介されているような、気づきを促すタスクを多重的に行う授業デザインの中に、上記のポイントを含む読み方の音声的な特徴を習得できるようなタスクを入れていく方法も考えられるであろう。また、小林（2008）で紹介されている情報を付加した拡張型語彙リストの使用のような予習語彙リストの中に、上記の特徴も含んだ付加情報を入れていくということで、より確実な読み方の習得に繋がるとも考えられる。

このように、音声的要素を取り入れながら、言語処理過程上、間違いやすい点を意識させる指導を行い、学習者の負担が少しでも軽くなるような漢字指導方法が必要であり、今後検討していく必要があるであろう。

7. おわりに

本稿では、上級日本語学習者に対する漢字復習テストにおいてその誤答の傾向を分析し、音韻レベルである「モーラ数」と「子音／母音」に着目して、モーラ数と母音は保持されやすいという傾向があるということ指摘した。さらに、それは日本語母語話者の音韻レベルにおける言い間違いの傾向と類似していることを明らかにした。これらのことから、言語処理機能から考えた際、音声面からのアプローチで間違いやすいと考えられる点を意識させる指導を行うことで、学習者の負担が少しでも軽くなる漢字学習が行えるということを主張した。

今後の課題としては、調査対象の誤答傾向に見られた「意味の類似性」についても言い間違いとの比較検証を行うこと、そして、音声処理ルートの仕組みを漢字教育へ生かすことができるような具体的な教材開発をすることが挙げられるだろう。

これまで漢字教育と音声教育は別に扱うことが多かったが、漢字語彙教育と音声教育の研究知見を相互に関連させながら、指導方法を具体的に検討していくことがこれからは重要になっていくのではないかと考える。

注

- 1 対象学生は日本滞在歴が1年以上、JLPTのN1レベルである。
- 2 小数点第2位四捨五入。
- 3 宮城（1992）においては、日本語学習者が漢字を読む際にどのように音イメージを経由しているかについて検討されており、「漢字を音読する場合には、意味を介さないで字面を追って読む場合には、漢字→形態イメージ→音イメージ→音声、意味を理解しながら

読む場合は、漢字→形態イメージ→意味イメージ⇄意味→音イメージ→音声という処理が考えられる (p.7))」とある。これは「形態イメージ」を図1の「語彙選択 (Lexical Selection)」、「意味」を図1の「メッセージ (MESSAGE)」として捉えることができるかもしれない。

4 非漢字圏のみを対象にした調査については今後の課題としたい。

参考文献

- 石原嘉人 (2012) 「漢字圏の学生にとっての漢字語彙習得」『留学生教育 第9号』琉球大学留学生センター紀要 pp.35-52
- 石原嘉人 (2013) 「中国語,韓国語,ベトナム語の漢字音の韻尾『-n』『-ng』『入声音』と日本語の音読との対応関係」『JSL 漢字学習研究会誌第5号』 pp.65-71
- 加納千恵子 (2000) 「中上級学習者に対する漢字語彙教育の方法」『筑波大学留学生センター日本語教育論集 15』
- 加納千恵子・魏娜 (2017) 「中上級学習者のための音声を利用した漢字語彙テストの試み：上級漢字力診断テストの開発に向けて」『筑波大学グローバルコミュニケーション教育センター日本語教育論集 32』 pp.47-64
- 魏娜 (2012) 「日本語の漢字語彙テストから見た中国人中級学習者の漢字語彙処理の問題」『日本語教育方法研究会誌 vol.19 No.1』 pp.46-47
- 魏娜 (2013) 「日本語の漢字語彙テストから見た中国人中級学習者の漢字語彙の処理の問題—視覚呈示と聴解呈示の比較を中心に—」『JSL 漢字学習研究会誌第5号』 pp.41-48
- 魏娜 (2014) 「中国人日本語学習者の漢字語彙の音声処理について—処理の正確さと迅速さを思として—」『JSL 漢字学習研究会誌第6号』 pp.1-9
- 窪園晴夫 (1995) 『語形成と音韻構造』くろしお出版
- 黒崎典子 (1997) 「日本語音声教育における長音の指導」『学習院大学国語国文学会誌』第40号 pp.96-110
- 国際交流基金日本語国際センター (1989) 『教師用日本語教育ハンドブック 6 発音 改訂版』
- 国際交流基金 (2008) 『文字・語彙を教える』ひつじ書房
- 国際交流基金 (2011) 『中・上級を教える』ひつじ書房
- 小林由子 (2008) 「漢字・語彙学習における『語彙リスト』の役割」『日本語教育方法研究会誌』 vol.15 No.2 pp.42-43
- 寺尾康 (2002) 『言い間違いはどうして起こる?』岩波書店
- 寺尾康 (2008) 「言い間違い資料による言語産出モデルの検証」『音声研究』第12巻 第3号 pp.17-27
- 寺尾康(2009) 「発話のメカニズムをさぐる」大津由紀雄編著『はじめて学ぶ言語学』ミネルヴァ書房 pp.191-209

- 寺嶋弘道・小林潔子 (2009)「コロケーション情報を用いた漢字語彙学習の試み」『ポリグロ
シア』第 17 巻 立命館アジア太平洋研究センター pp.139-149
- 藤田佐和子 (2019)「やる気にならない学習者の学習意欲を高める自律学習—上級漢字・語
彙クラスで基礎的知識を習得する方法と教材作成—」『金沢大学国際機構紀要 1 号』
pp.81-98
- 藤田朋世・渡部みなほ・増田真理子・前原かおる・副島昭夫・野口真早季・菊地康人 (2014)
「漢字圏学習者を対象とした漢字音「再学習」支援のための授業デザイン—中級学習者向
けコース 4 日間の実践から—」『日本語教育方法研究会誌』 vol.21 No.1 pp.54-55
- 宮城幸枝 (1992)「漢字指導についての一考察—漢字の音声とイメージという観点から—」
『東海大学留学生センター紀要第 12 号』 pp.1-12
- Bock, J.K. and Levelt, W.J.M. (1994) "Language Production: Grammatical Encoding,"
M.A. Gernsbacher (ed.), Handbook of Psycholinguistics